

平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（S））研究状況報告書

◆ 記入に当たっては、「平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（S））研究状況報告書記入要領」を参照してください。

ローマ字	NAGANO YASUHIKO					
① 研究代表者氏名	長野 泰彦			② 所属研究機関・部局・職	国立民族学博物館・民族文化研究部 ・教授	
③ 研究課題名	和文	チベット文化圏における言語基層の解明 — チベット・ビルマ系未記述言語の調査とシャンシュン語の解説				
	英文	Linguistic Substratum in Tibet ---Synchronic survey of undescribed Tibeto-Burman languages and reconstruction of Zhangzhung language				
④ 研究経費 18年度以降は内約額 金額単位：千円	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	総合計
	16,300	12,300	13,900	11,900	14,700	69,100
⑤ 研究組織（研究代表者及び研究分担者） *平成18年3月31日現在						
氏名	所属研究機関・部局・職	現在の専門	役割分担（研究実施計画に対する分担事項）			
長野 泰彦	国立民族学博物館・民族文化研究部・教授	言語学	研究の総括、国際連携調整			
武内 紹人 高橋 慶治	神戸市外国語大学・外国語学部・教授 愛知県立大学・外国語学部・助教授	言語学 言語学	シャンシュン語解析及びチベット文法学研究 ガルワールヒマル諸語の記述及び言語基層理論の研究			
池田 巧 立川 武蔵 本田 伊早夫	京都大学・人文科学研究所・助教授 愛知学院大学・文学部・教授 名古屋短期大学・英語コミュニケーション学科・助教授	言語学 宗教学 言語学	河西走廊諸語記述及びチベット文法学研究 シャンシュン語・チベット語対訳語彙集の文献学的解析 タム語群の記述分析			
白井 聡子 菊澤 律子	京都大学・大学院文学研究科・講師 国立民族学博物館・先端人類科学研究部・助教授	言語学 言語学	羌語記述及び言語類型論研究 歴史言語学方法論の研究			
⑥ 当初の研究目的（交付申請書に記載した研究目的を簡潔に記入してください。）						
<p>チベット・ビルマ語族は、中国・青海省、四川省、雲南省、チベット自治区、ヒマラヤ地域、インド東北部と西北部、パキスタン東北部にわたる広い地域に分布する大言語グループであり、それら諸言語の共時的・通時的研究はこの50年間に長足の進歩を遂げた。しかし、それは主要な言語の分析に基づいた系統関係の大枠が示された段階であり、未だ解読されていない文献言語や記述のなされていない言語が多数残っている。最も古い文献資料を有するチベット語・チベット文化圏を取ってみても、多様な基層言語が後にチベット文語の基礎となる自然言語と接触するプロセスを経たはずである。本研究はこの言語動態を河西九曲の地（四川省西北部）・チベット西部・及びヒマラヤ地域での未記述言語のフィールドワークによつて的確に把握し、その脈絡において未解読言語のひとつであるシャンシュン語文法構造の再構成を行うことを目的とする。</p> <p>このための具体的な研究事項は下記の5点にまとめられる。</p>						
<p>① チベット・ビルマ系未記述言語の調査研究とデータベース作成： チベット文語の基礎となる自然言語(pre-Tibetan)に基層言語として接触したと考えられる、河西九曲の地（四川省西北部）、チベット西部、及びヒマラヤ地域の言語、特に、木雅語、嘉絨語、羌語、ガルワールヒマル諸語、の形態統辞論を中心とした記述研究を行い、カリフォルニア大学 STEDT プロジェクトとの連携の下に文法データベースを作成する。</p> <p>② Pre-Tibetan の再構成とチベット語文語成立過程の研究： 基層言語と文語チベット語との比較を通じて、基層言語が文語文法に及ぼした影響を探り、同時にチベット語文語がいかんして整備されたのかを跡付ける。</p> <p>③ シャンシュン語文献の解読と文法の再構成： チベットに仏教が齎される以前にドミナントであったボン教徒の言語、シャンシュン語を、文献研究と統計数学の立場から総合的に解析し、解読を目指す。</p> <p>④ 歴史言語学方法論の批判的検討： 上記の実証的研究を行う立場から、言語の歴史を再構成する方法としての比較方法と類型論的アプローチがどこまで有効であるか、また、どのような視点を加味すれば歴史を再構できたと言えるのかを、言語基層の観点から理論的に追求する。</p> <p>⑤ 国際的な研究資源の共有体制の整備： 研究を効率的に行うため、世界的な拠点と研究資源を共有する体制を具体化する。</p>						

⑦これまでの研究経過（研究の進捗状況について、必要に応じて図表等を用いながら、具体的に記入してください。）

●年度別研究経過

16年度

- ① チベット・ビルマ系未記述言語の調査研究とデータベース作成
 - a) 長野がギャロン語を、白井が羌語を、池田が木雅語を、中国で記述調査した。また、高橋がキナウル語をインドで、本田がセケ語をネパールで調査した。
 - b) 分担者は記述調査の結果をカリフォルニア大学の STEDT プロジェクトで収集された語彙データの検証を行った。
- ② Pre-Tibetan の再構成とチベット語文語成立過程の研究
 - a) 武内・池田・立川がチベット伝統文法学のテキストの収集を行った。
- ③ シャンシュン語文献の解読と文法の再構成
 - a) シャンシュン語には敦煌出土文献に代表される古いシャンシュン語(OZ)と11世紀以降に整備された新しいシャンシュン語(NZ)の2種がある。長野、武内が OZ を、白井・池田・本田・高橋が NZ を担当した。
 - b) OZ については英国 British Library が蔵する敦煌出土文献 OR8212/188 につき、全文データベースの作成に着手した。武内はこれに関連する補遺調査を英国で行った。
 - c) NZ については白井等4名がそれぞれ収集した現地調査の結果をもとに NZ 語彙の同定を行った。
 - d) NZ 文献の体系的な語彙集作成のため、長野・立川がティエンノルブ寺において文献の整備を行った。
- ④ 言語基層に関する歴史言語学方法論の検討
 - a) 言語基層に関する理論・方法論を体系的に集め、整理する作業に着手した。
- ⑤ 国際的な研究資源の共有体制の整備
 - a) 研究拠点間で研究資源共有体制を整えるため、米国とフランスの機関と協議を開始した。

17年度

- ① チベット・ビルマ系未記述言語の調査研究とデータベース作成
 - a) 長野がギャロン語を、白井が道孚語を、池田が羌語を中国で、高橋がマンチャド語をインドで、本田がセケ語をネパールで、それぞれ記述調査した。
 - b) 分担者は記述調査の結果を STEDT プロジェクトで収集された語彙データの検証を行った。
- ② Pre-Tibetan の再構成とチベット語文語成立過程の研究
 - a) チベット伝統文法学のテキストの収集をサキャ学派について立川が行った。
- ③ シャンシュン語文献の解読と文法の再構成
 - a) OZ についてはフランス国立文書館が蔵する敦煌出土文献 VP755 につき、データベース化と、音節構造、語彙形式、文法構造について解析を進めた。
 - b) NZ については白井等4名がそれぞれ収集した現地調査の結果をもとに NZ 語彙の同定を行った。
 - c) NZ の網羅的な Lexicon を作成するため、ボン教寺院と共同で NZ の例文を 35 種の文献から抽出し、チベット語訳を付する作業に着手した。
 - d) チベット語とシャンシュン語との対訳語彙集 *mDzod-phug* のデータベース化を、立川が Leiden Bon Project と共同で行った。
- ④ 言語基層に関する歴史言語学方法論の検討
 - a) 類型論と比較方法に関する先端的な歴史言語学方法論の調査を米国で行った。
- ⑤ 国際的な研究資源の共有体制の整備

研究拠点における研究資源を共有する体制を整えるべく、Leiden Bon Project、チュラロンコーン大学の Tibet Project 及び Virginia Tibet Project と具体的協議を行った。

●研究事項別の進捗状況

- ① チベット・ビルマ系未記述言語の調査研究とデータベース作成

従前の記述を精密化させる資料が着実に集積されつつあり、データベース化を平行させている。また、今まで知られていなかったチベット・ビルマ系の言語が複数発見され、それらの文法概要のとりまとめを急いでいる。
- ② Pre-Tibetan の再構成とチベット語文語成立過程の研究

チベット伝統文法学のテキストの収集とデータベース化は予定通り進行している。Pre-Tibetan の再構成はチベット語アムド方言の記述完成を待って行う。
- ③ シャンシュン語文献の解読と文法の再構成

NZ については、STEDT データとの同定が順調に進行している。また、ボン教学僧との協働による NZ 語彙集成は選定した 35 文献のうち 30 件について 18 年度中に終了する。OZ については、敦煌出土文献 OR8212/188 及び VP755 のデータベース化と解析作業が進んでいるが、解読作業につき若干の問題がある(⇒⑩に詳述)。
- ④ 言語基層に関する歴史言語学方法論の検討

類型論と比較方法に関する先端的な歴史言語学方法論が世界的に行われているが、これに言語基層論の観点を加味した国際シンポジウムを 2008 年に開催すべく、準備に入った。
- ⑤ 国際的な研究資源の共有体制の整備

カリフォルニア大学 STEDT プロジェクトとの間では、研究分担者の属する機関との研究資源共有化が実現し、直接アクセスすることが可能となった。他のプロジェクトとも交渉を継続する。

⑧特記事項 (これまでの研究において得られた、独創性・新規性を格段に発展させる結果あるいは可能性、新たな知見、学問的・学術的なインパクト等特記すべき事項があれば記入してください。)

研究事項別に特記事項を整理すれば下記の通りである。事項番号は「研究経過」のそれに一致。

① チベット・ビルマ系未記述言語の調査研究とデータベース作成

川西走廊(河西九曲の地=四川省西北部)言語の調査で、未記述言語を新たに発見した。ダバ語、道孚語、木雅語、である。ダバ語は今まで報告が皆無である。道孚語と木雅語は既に報告があるが、それとは異なる言語が同じ地域に話されていることが判明した。従来ギャロン語の方言と言われてきたが、ギャロン語ではないことも分かり、しかも新木雅語のインフォーマントは Minyag (西夏)の末裔と自称している。系統関係が認められれば、ロロ・ビルマ的な特徴をチベット文化域の言語基層の一部として考慮する必要があることとなり、この言語グループの歴史を再構築する上で重要な示唆を与えるものである。

② Pre-Tibetan の再構成とチベット語文語成立過程の研究

この目的のため、従前等閑視されてきたチベット語アムド方言の記述研究を行っている。この結果、アムド方言を、文語チベット語をベースとする中央チベット語の方言とするよりはむしろ、チベット語はアムド語を改新的に整備して文語と中央方言を形成したと考える方が自然であることが、音論と統辞論の面で、明確になりつつある。このことは従前のチベット語史を全面的に書き変える、新たな知見である。

③ シャンシュン語文献の解読と文法の再構成

NZ は 13 世紀以降に、仏教側の弾圧と教理上の抗争に絡んでボン教側が再構築した、新しいシャンシュン語である。敦煌期に死語となった OZ の remnant として、OZ 解読に不可欠の資料であるが、NZ に関する包括的な語彙資料はない。ボン教学僧との協働による NZ 語彙集成ドラフトが 3 年後に完成する見込みが立ったことは、OZ のみならず、ボン教文化研究を格段に進展させると思われる。

④ 国際的な研究資源の共有体制の整備

カリフォルニア大学 STEDT プロジェクトと研究資源共有化が実現した。今後直接アクセスできる研究拠点を増やすべく尽力し、言語学一般とチベット学を活性化させたい。

⑨研究成果の発表状況 (この研究費による成果の発表に限り、学術誌等に発表した論文(掲載が確定しているものを含む。)の全著者名、論文名、学協会誌名、巻(号)、最初と最後のページ、発表年(西暦)、及び国際会議、学会等における発表状況について記入してください。なお、代表的な論文3件に○を、また研究代表者に下線を付してください。)

論文

- 長野 泰彦 「ギャロン語の否定辞」『国立民族学博物館研究報告』29巻3号、pp.357-374、2005
- 武内 紹人 (舘野和己と共著) 「中央アジア出土のチベット語木簡—その特徴と再利用—」
『木簡』26号、pp.259-283、2004
- 白井 聡子 「ダバ語(川西走廊諸語)の助動詞について」『京都大学言語学研究』23号、p.217、
2004
- TAKEUCHI, Tsuguhito “Sociolinguistic Implication of the use of Tibetan in East Turkestan from the end of Tibetan Domination through the Tangut Period(9th-12th c.)”, *Turfan Revisited –The First Century of Research into the Arts and Cultures of the Silk Road*, pp.341-348, 2004
- IKEDA, Takumi “The Mu-nya language and the Tangut language : Some problems in their comparison”, *Studies on Sino-Tibetan Languages: papers in Honor of Professor Hwang-cherng on His Seventieth Birthday*, pp.383-402, 2004
- HONDA, Isao “Grammaticalization of deictic motion verbs in Seke”, *Himalayan Language Past and present*, pp.285-310, 2004
- KIKUSAWA, Ritsuko “Comparative linguistics: a bridge that connects us to languages and people of the past”, *Language in Hawai’i and the Pacific*, pp.415-533, 2005
- 白井 聡子 「ダバ語メト方言における音素体系と子音連続の相関」、『東ユーラシア言語研究』1集、pp.307-323、2006
- TAKEUCHI, Tsuguhito “Old Tibetan Buddhist Texts from post-Tibetan Empire Period (mid 9th to late 10th centuries)”, *Old Tibetan Studies 2: Proceedings of the 10th Seminar of the International Association for Tibetan Studies* (in print)
- 池田 巧 「西夏語和羌語支語言的詞彙比較：以認同詞試探關係」、『中国西夏学第二届国際学術研究会論文集』 (印刷中)
- HONDA, Isao “Seke Texts (part I)”, *Bulletin of Nagoya College* (in print)

⑨研究成果の発表状況（続き）（この研究費による成果の発表に限り、学術誌等に発表した論文（掲載が確定しているものを含む。）の全著者名、論文名、学協会誌名、巻（号）、最初と最後のページ、発表年（西暦）、及び国際会議、学会等における発表状況について記入してください。なお、代表的な論文3件に○を、また研究代表者に下線を付してください。）

発表

TAKEUCHI, Tsuguhito, "Early and Late Tibetan Texts regarding Khotan."The Kingdom of Khotan to AD 1000: A Meeting of Cultures: The Symposium held in conjunctionwith the exhibition The Silk Road: Trade, Travel, Warand Faith (2004, British Library, UK).

TAKEUCHI, Tsuguhito, "Classification, Cataloguing and Dating the Stein Tibetan Texts - Preblems and Progress." The Collections of Sir Aurel Stein andAlexander Csoma de Körös in the Oriental Collection: State of Cagalogues (2004, Hungary Academy of Sciences, Budapest).

HONDA, Isao, "Preliminary report on Kaike (Dolpa, Nepal)" Presented in The 10thHimalayan Languages Symposium (2004,Thimphu, Bhutan).